

フォトフェスタ2013「第20回写真甲子園」「第29回東川町国際写真フェスティバル」「どんとこい祭り」

夏の祭りは今年も最高潮

8月6日から同月11日まで6日間、町内は写真の祭典、フォトフェスタ2013の「第20回写真甲子園」「第29回東川町国際写真フェスティバル」「どんとこい祭り」で盛夏のにぎわいを見せました。

8月6日から前半の4日間は、写真甲子園の本戦大会。過去最多の522校の応募の中から初戦を勝ち残

った全国20校の代表選手が北海道の大地を舞台に集まり、作品作りを競いました。20回目の記念大会は、過

校として出場し、初出場校は昨年より1校多い8校となりました。



10日、羽衣公園入口付近

去19回応募を続けてこれまで本戦大会出場を果たせていなかった聖和女子学院高等学校（佐世保市）、大分東明高等学校（大分市）の2校が特別記念枠で出場。岩見沢高等養護学校が身体的なハンデを持つチームとして初めて北海道ブロックから代表

激戦の末優勝をつかんだのは、2年連続8回目出場の埼玉栄高等学校（関東ブロック代表）。過去3度優秀賞を経て初の優勝を現実のものにし、「どうしましょ！早くお母さんに電話したい」日原慧子さん（3年）と思わず第一声。「すっごく楽しかった。自分の中の最高の写真は、ファイナル審査の時に提出した最後の子供の写真」と言えば、初出場の宮城理恵さん（1年）は、こらえきれない涙いっぱい「大変だったけれど楽しかった。

ずっと写真続けます！」。今年の町民特別賞は、ファースト、セカンド、ファイナルの各審査ごとに1校を選抜。各校が米俵1俵（60キログラム）を受賞しました。

帯広南商業高等学校は、第1ステージの提出作品「One Day」で、2年連続3回目の町民特別賞。「地元の人にいいと思ってもらったのがうれしい。有名な人になった気分」。

身体的不自由というハンデを乗り越え、健常者とは違う目線で作品作りを追い続けた岩見沢高等養護学校の選手たちに対し、竹田津実審査員は「体の不自由な

ものが持つている目線を学ばせてもらった」と敬意を表しました。

◇
後半10日（土）、11日（日）の2日間は、第29回国際写真フェスティバル・



東川賞受賞作家作品展開幕テープカット（10日、文化ギャラリー玄関）